

年間第14主日

ルカ 10・1-12、17-20

2022.7.3

カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

聖歌にこんなのがありますね。聖歌をみんなで歌わなくなってから久しいですけど、「♪主と共に働くわれらは、主と共にその実りを味わう♪」。キリスト教にとって、神様と共に働く、あるいは神様の働きに参加するということは、中心的というか、信仰の本質です。神様にわたしたちの願っていることを実現するために働いてもらうのではなく、既に神様は働いていらっしゃる。その働きに参加している。

今日、子どもたちが侍者を、先週日曜日のミサが終わった後に結構バッチリ練習していて、今日初めてやる子たちが二人、あと二人練習した子がいますね。ある意味、この典礼を通して主と共に働くということの第一歩を始めたわけですね。だから、典礼だけじゃないんですけど、これから信仰生活を通して、神様と共に働くということは自分にとっても嬉しいことなんだっていうことを、いろんな人に支えられながら、子どもたちが体験してくいってくれば良いなと思います。

今日の福音の中で、弟子たちはイエス様の働きに参加すべく、イエス様によって力を与えられて、派遣されていきました。それは、具体的に現代の言い方ではどんな働きだったかはっきりは分かりませんが、でも自分のためではなくて誰かのために働いて、そしてある程度それを成し遂げて、成功してイエス様のもとに戻って来た。そんな話でしたね。

どこでも同じ様にイエス様の業に加わる。それぞれの場所で、誰かのために、誰かの命を支える、あるいは支え合う、いろんな活動がありますね。でも、注意しなきゃいけないことは、どんな働きであっても、どんなに働く者であっても、イエス様によって、イエス様の働きに加えられている、加えていただいているんだということを忘れちゃいけない、ということなんです。いろんなことがうまくいっているときこそ、イエス様の力によってそれが実現しているんだということを忘れて、自分たちがやっている、そういうようなことになり勝ち

かもしれない。

今日の弟子たちにもその傾向がちょっと既に見えているようです。いろんな働きから帰ってきて、そして、「お名前を使うと、悪霊さえもわたしたちに屈服します」と言っちゃっている。でも、悪霊が屈服するのは弟子たちじゃなくて、弟子たちを遣わしているイエス様だし、父である神様ですね。イエス様の名前を使って自分たちに服従させる、そういうことじゃない。

「自分たちがやってるんだ」、と思っちゃう。その勘違いが行き着く先は、「自分がこれだけやってやっているんだ」という思いですね。それをただ神様のほうにもっていけばまだ良いわけなんですけれども、そしたら、神様のほうから何らかの軌道修正のための恵みを与えられるかもしれません。しかし大体は神様のほうにはもっていかないんですよ。「これだけやってやっているんだ」と周りの人にもっていき、周りの人に対する態度にそれが出てくることが多いかもしれません。「自分はこれだけやってるんだ」と、自分だけが良いことをやっているような錯覚になっている。そして他の人がやっている良いことのいろいろな重荷とかが見えなくなっちゃう。

わたしも今、高円寺教会と同時に、カトリック東京国際センターの東京教区の外国人司牧の、司牧だけじゃなくて宗教にかかわらない生活の支援にも身を置いています。自分だけがやっているみたいな気持ちになることもあるし、そういう「人権を守る」的などころでいろんな団体や人とお会いすることがありますけど時々、あるいはしばしばそういうような傾向を感じるがあります。自分たちがやっている活動が本当に大切なんだ（大切なのは間違いないんだけど）、そこに協力しない人は駄目だ、とかね。自分たちが支援している対象の相手に対しては非常に愛があるんだけど、それ以外の人に人間愛が無いとか、それは、人間愛に基づく活動というよりは活動愛じゃないかと思っちゃうことがちょいちょいあります。だから、わたしたちも気を付けていかななくてはいけないなと思います。

だから、弟子たちにイエス様が「悪霊があなたがたに服従するからといって、喜んではならない。むしろ、あなた方の名が天に書き記されていることを喜びなさい」っておっしゃる。つまりは、わたしがこれだけのことをなすとげましたというのではなく、神様との繋がりでそれを実現しているということを忘れちゃいけないよ、という呼びかけなんじゃないかなと思います。わたしたちは、自分が何か良いことをしたっていうときには自分の力、そして何か嫌なことが起こったら神様のせいと思いがちだけど、本当は、良いことをやっている、あ

るいは、良いことができた、その時こそ神に感謝なんだろうなと思います。なぜならば、イエス様が今日おっしゃってますけど、本当は、本来はわたしたち一人ひとり狼の群れに送り出されている小羊のように無力な者である。だけど、何事かできているとするならば、それは神様の恵みのうちに、神様の力によって、イエス様のお働きに加えていただいていることを通して、良いことができているのだ。それが信仰のものの見かただということだと思います。

わたしたちはミサの最初に、自分たちがやった良くなかったこと、あるいは良いことができなかったことについて反省します。と同時に、だけどそれぞれ良いこともやっていると思うんです。そのことを思い起こしながら、一人ひとりが良いことをやっている。でもそれは神様の恵みのうちにすることができた。神に感謝。一人ひとりの反省も神の恵みのうちにできた。感謝のうちにミサをお捧げしたいと思います。